

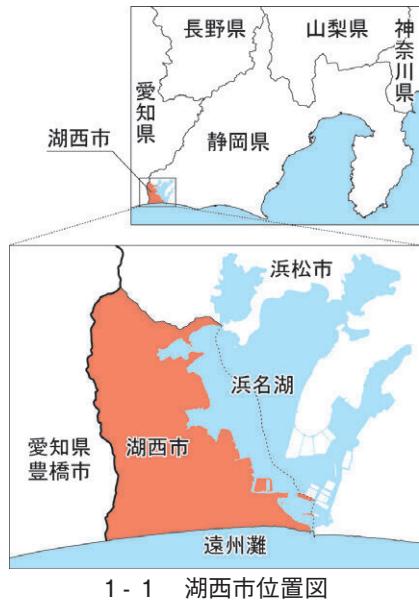
第1章 湖西市の概要

第1章 湖西市の概要

第1節 自然的・地理的環境

1. 位置・面積

本市は静岡県の最西端、浜名湖の西岸に位置する県境の市で、静岡県浜松市と愛知県豊橋市に接しています。市域の東西距離は最大 11.4km、南北距離は最大 12.5km です。総面積は 86.56km² で、そのうち陸地は 68.47km²、浜名湖面は 18.09 km² です。



2. 地形・地質・水系

(1) 地形・地質

本市の地形は、北部の山地、中央部から南部に広がる台地、及び遠州灘沿岸と浜名湖に面して広がる低地の3つに分けることができます。

北部の山地は赤石山脈南縁の弓張山地の一部で、「湖西連峰」とも呼ばれています。標高300mから400mほどの主尾根が南北にのび、そこから東西に支尾根がのびています。湖西連峰は愛知県との県境と浜松市との市境となっています。湖西連峰を構成する岩石は主に中世代ジュラ紀（2億年～1億4000万年前）に付加されたチャートや砂岩、泥岩のほか、これらの岩石が不規則に混ざりあった混在岩です。湖西連峰で分布するチャートは「大知波石」と呼ばれ、かつては石材として盛んに利用されていました。

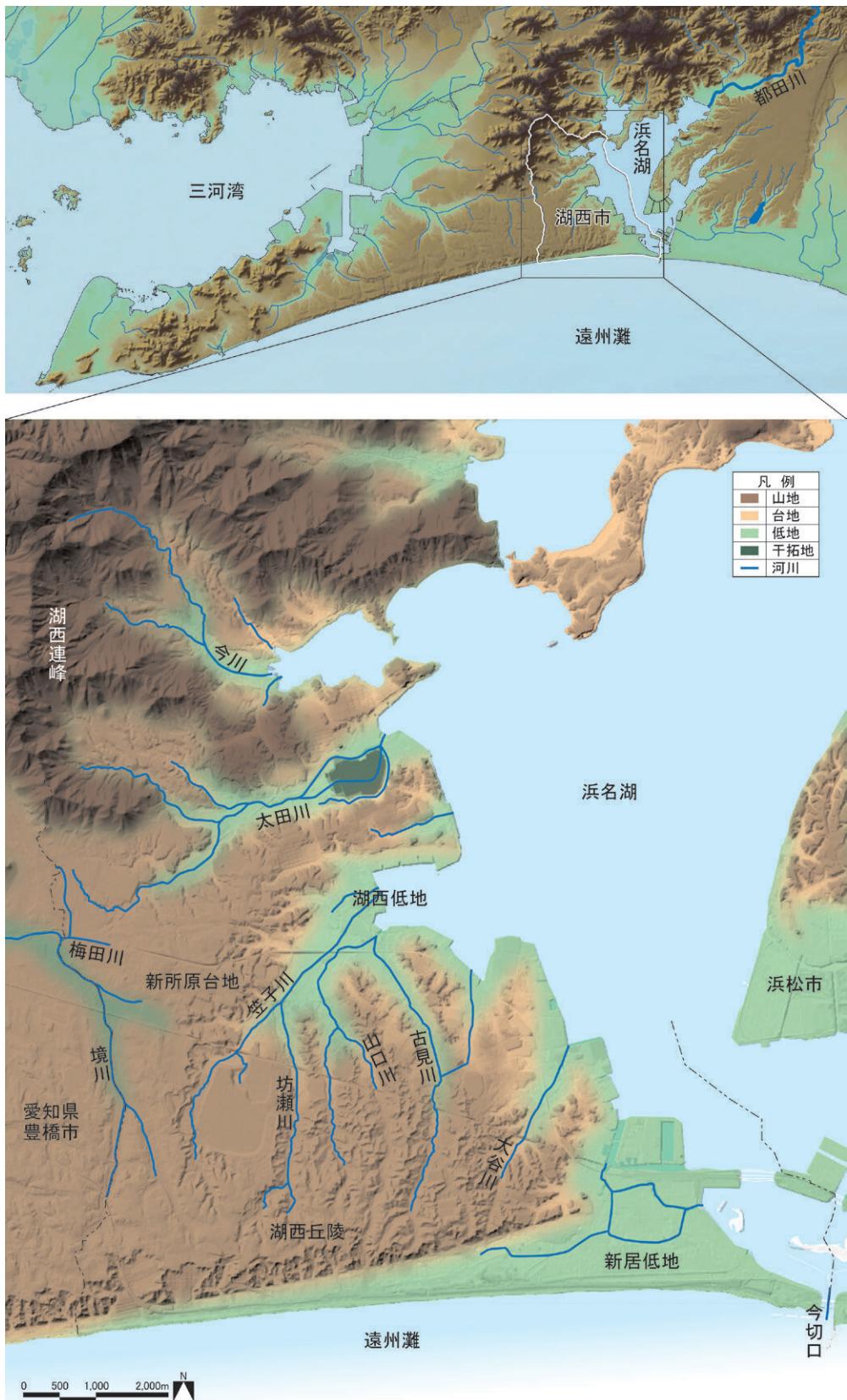
中央部から南部にかけてひろがる台地のうち、北側を「新所原台地」、南側を「湖西丘陵」と呼びます。これらの台地は新生代第四紀の後期チバニアン期～後期更新世（30万年から1万1700年前）に形成された地形です。主に砂礫や粘土で構成されており水はけが良いのが特徴です。

新所原台地は現在の新所原駅周辺から新所地区にかけて広がります。湖西連峰や湖西丘陵に囲まれた低地に河川が運んだ土砂が堆積し、それが隆起して形成されました。標高は30m前後です。

湖西丘陵は、本市の南部に広がっており、豊橋市南部から広がる天伯原台地の東縁にあたります。天竜川が運搬した土砂が海底に堆積した後、隆起して形成されました。標高は白須賀地区が70～80mほどで最も高く、北北西方向へ向かって低くなっています。南端は遠州灘により削られ崖（海食崖）になっています。湖西丘陵には南北方向に延びる小高い丘陵が複数あります。これらは台地の土砂が河川のはたらきで削り取られることでできた地形です。

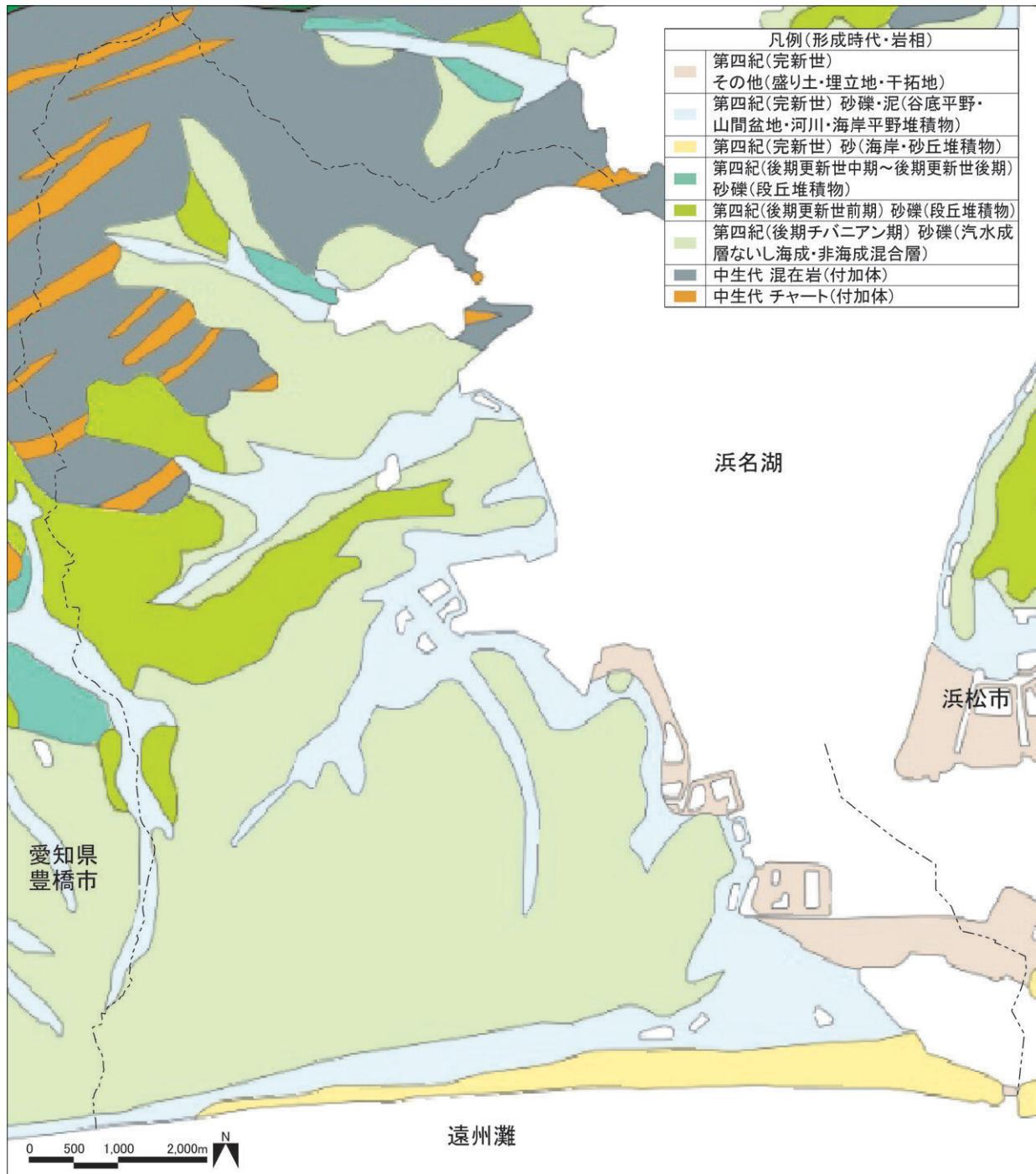
遠州灘の沿岸と河川付近に広がる低地は、完新世（1万1700年前以降）にできた地形です。河川や海が運んだ土砂が堆積して形成されました。丘陵間の谷部にも広がっています。市

の中央部に位置する「こさいていち湖西低地」と、南部に位置する「あらいていち新居低地」が主要な平野です。標高は0～15m程度で、砂や粘土の層でできています。また、はまなこ浜名湖の沿岸に近代以降の埋立地が多数分布しています。



1 - 2 地形図

(出典：国土地理院 地理院タイル一覧 色別標高図〈海域部分は海上保安庁海洋情報部の資料を使用して作成〉、ベクトルタイル「地形分類(自然地形)」、国土数値情報より作成)



1-3 地質図

(出典：20万分の1日本シームレス地質図V2(産総研地質調査総合センター)を使用し、加筆修正して作成)

(2) 水系

本市を流れる河川は、都田川水系と梅田川水系に属します。都田川水系は、静岡県の西部に位置し、浜名湖に流入する河川に加え、浜名湖とその支湖から成り、今切口から遠州灘へ注いでいます。水系の名称は、浜松市浜名区を流れ浜名湖の北部に注ぐ都田川から付けられています。梅田川水系は、愛知県と静岡県にまたがる梅田川及びその支川から成り、三河湾へ注いでいます。本市の主要河川のうち、梅田川と境川が梅田川水系、それ以外が都田川水系に属します。

浜名湖は都田川水系の最下流部です。本市を流れる川の多くが浜名湖へ注いでいます。面積は約72km²で、日本で10番目に大きい湖です。湖水は今切口と呼ばれる約200mに狭められた湖口から、直接遠州灘へ注いでいます。完新世(1万1700年前)より前は遠州灘の湾でしたが、沿岸流によって運ばれた土砂が湾をふさぐことで湖になりました。湖内の水深は浅く、北部が9mから12m、南部は4m程度です。15世紀までは浜名川を経て遠州灘へと注ぐ淡水湖でしたが、明応7年(1498)から永正7年(1510)にかけて頻発した地震や津波、風水害により、浜名川の河口付近が土砂で塞がれ、さらに今切口が開口したことで汽水湖になりました。

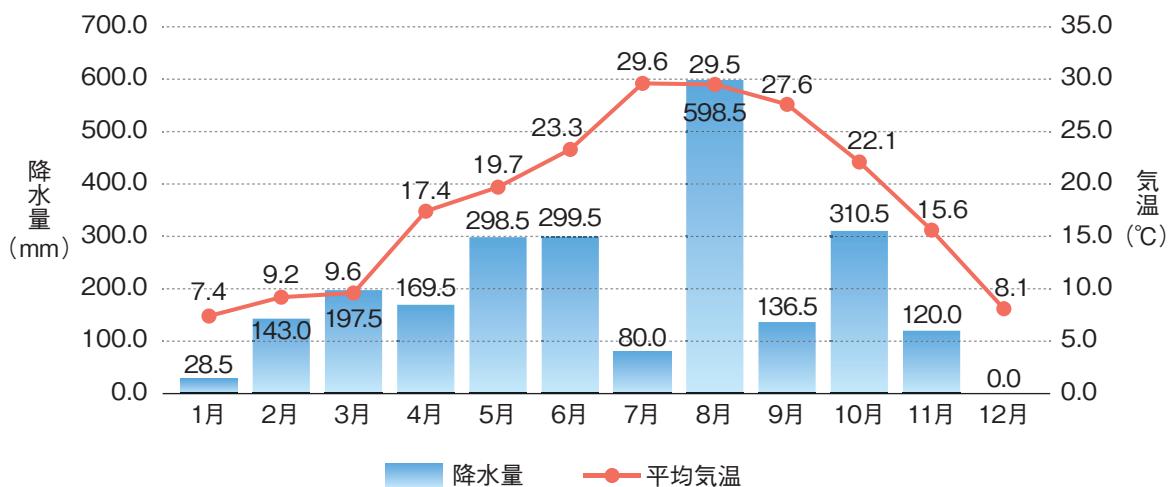
都田川水系の河川のうち、湖西連峰を水源地とする今川と太田川は、本市の北部を西から東へ流れています。また、湖西丘陵を水源地とする笠子川、坊瀬川、山口川、古見川及び大谷川は本市の南部から北へ流れています。

梅田川水系の河川は、梅田川と境川があります。境川は愛知県との県境の河川です。湖西丘陵の水源地から北へ流れ、白須賀地区を経た先で梅田川と合流し、三河湾へと注ぎます。

3. 気候

本市の年平均気温は17°C前後です。四季を通じて温暖で、真冬日はほとんどありません。年間の降水量は1,900mm前後です。

冬は「遠州のからっ風」と呼ばれる、風速4~5m/sの西北西の乾燥した強風が吹きます。これはシベリア方面で発達する高気圧が吹き出す季節風で、日本列島にぶつかって日本海側に雪を降らせた後、山を乗り越えて静岡県の西部地域まで吹き込みます。



1-4 雨温図（令和6年度）
(出典：令和6年版 湖西市統計書)

4. 動植物

(1) 植生・植物

本市の植生は山地、台地、^{はまなこ}浜名湖沿岸部、及び^{えんしゅうなだ}遠州灘海浜部の4つに分けられます。

北部の山地は、スギ類やヒノキ類の植林地が大部分を占めており、その中にシイ類やカシ類、ツバキ類からなる常緑広葉樹林やコナラ群落が点在しています。また、山地の裾部にはミカンの常緑果樹園が広がっています。

台地はシイ類やカシ類などの常緑広葉樹や竹林、植林地が混在しています。

^{はまなこ}浜名湖は沿岸の一部でヨシ原が繁茂しています。かつては広い範囲に自生していましたが護岸工事により減少しました。水中には、長さ20cmから100cmのアマモ類やコアマモ類などの海草が群生しており、江戸時代はこれらの海草を肥料として利用していました。近年はアマモの群生地が急減しており、^{はまなこ}浜名湖の生態系や漁業に悪影響を及ぼしています。

^{えんしゅうなだ}遠州灘の海浜部にクロマツ林が分布しています。これらは海岸の防風林や東海道沿いの松並木として植林されたものです。また、海岸の砂地でハマヒルガオやハマボウといった海浜部特有の植生を見ることができます。クロマツは本市の歴史性や地域性を反映する樹木として市の木に制定されていますが、近年はマツノマダラカミキリが媒介するマツノザイセンチュウによる枯死被害が多発し、減少しています。

静岡県に生息する希少種を記載した『静岡県レッドデータブック』に、本市を含むメッシュで確認された植物として植物47種、菌類3種が掲載されています(資料編参照)。

(2) 動物

山地や台地に、ニホンカモシカやニホンイノシシ、ニホンジカ、アナグマ、ニホンザルなどの日本在来の哺乳類が生息しています。また、アライグマやヌートリア、ハクビシンなどの外来哺乳類も生息しています。近年は生息数の増加や、耕作放棄地及び荒れた雑木林の増加による生息域の拡大により、住宅地や畠地での獣害が増加しています。

汽水湖である^{はまなこ}浜名湖に、マダイやヒラメなどの海水魚のほか、ボラやクロダイ、マハゼなど、汽水域を好む魚類が生息しています。



1-5 湖西連峰の常緑広葉樹林



1-6 海浜部のクロマツ林



1-7 ニホンカモシカ

鳥類は、浜名湖の沿岸部や市内の河川でカワセミやアオサギなどがよく観察されます。また、浜名湖は水鳥が非常に多く生息しており、カワウやゴイサギなどの年間を通じて生息する留鳥のほか、冬季はマガモやカンムリカツブリといった多数の渡り鳥が越冬のために飛来します。

遠州灘の海浜部は数多くの海鳥の生息地であり、砂浜はコアジサシやシロチドリといった希少な鳥類の営巣地となっています。また、アカウミガメの産卵地でもあります。

『静岡県レッドデータブック』に、本市で確認された動物として動物 14 種、は虫類 2 種、両生類 5 種、淡水魚類 10 種、昆虫類 25 種、陸・淡水産貝類 3 種が掲載されています（資料編参照）。



1-8 アオサギ

第2節 社会的状況

1. 市域の変遷

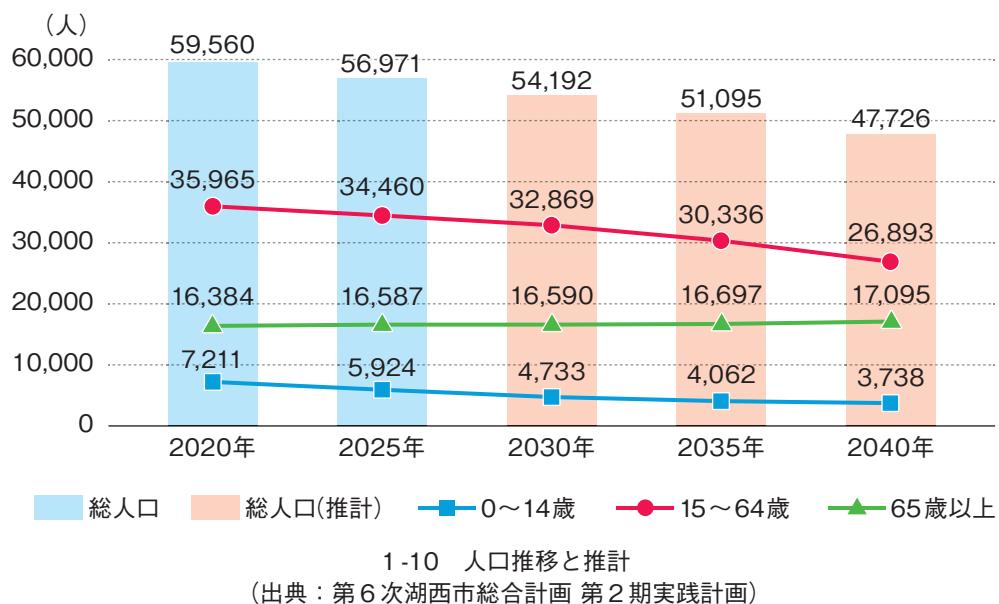
湖西市は、昭和 30 年（1955）に白須賀町、鷺津町、新所村、知波田村及び入出村が合併して成立した湖西町が、昭和 47 年（1972）に市制施行して誕生しました（以下、「旧湖西市」という）。さらに、平成 22 年（2010）に浜名郡新居町を編入合併し、現在の本市が成立しました。



1-9 旧町村範囲図

2. 人口

令和8年（2026）3月の人口は〇人です。昭和60年（1985）から増加を続けましたが、平成17年（2005）以降は減少に転じています。湖西市総合計画で、現在のペースで減少が続いた場合、令和22年度（2040）に47,726人に減少すると推計しています。また、人口構成比は年少人口（15歳未満）と生産年齢人口（15～64歳）の減少が続く一方で、老齢人口（65歳以上）が大きく増加し、少子高齢化がさらに深刻化すると推計しています。これらの状況を踏まえると、文化財の扱い手不足という問題は今後より深刻となることが見込まれます。



1-10 人口推移と推計
(出典：第6次湖西市総合計画 第2期実践計画)

3. 交通

（1）鉄道

鉄道交通は、東海道本線と天竜浜名湖線があります。東海道本線の駅は新居町駅、鷺津駅及び新所原駅があります。天竜浜名湖線の駅は新所原駅、アスモ前駅、大森駅及び知波田駅があります。また、停車駅はありませんが市内を東海道新幹線が通過しています。近隣の新幹線停車駅は東の浜松駅と西の豊橋駅です。東海道本線を利用した場合、鷺津駅からの所要時間は浜松駅が20分、豊橋駅が15分です。

（2）バス

バス路線は、本市が運行するコミュニティバス（コーちゃんバス）があります。コミュニティバスは市民が日常生活で利用することを目的としています。運行は民間の事業者へ委託しており、各集落の拠点と鉄道駅を結ぶ路線や、鉄道駅間を結ぶ路線を計6本設けています。また、公共交通の空白域の解消を目的に、自宅と指定施設を結ぶデマンド型乗合タクシー（コーちゃんタクシー）を運行しています。

(3) 道路

遠州灘沿いに、東の浜松市や西の愛知県豊橋市へ連絡する国道1号及び国道42号が通っています。国道1号の本市区間は浜名バイパス及び潮見バイパスと呼ばれており、区間全てが自動車専用道路です。本市には新居弁天IC [新居地区] と大倉戸 IC [新居地区]、白須賀IC [白須賀地区] の3つのインターチェンジが置かれています。また、浜名湖沿いには、東名高速道路の三ヶ日インターチェンジ方面へ連絡する国道301号が通っています。

これらの主要幹線道路に接続する形で、県道や主要地方道が主に東西方向へ配置されています。

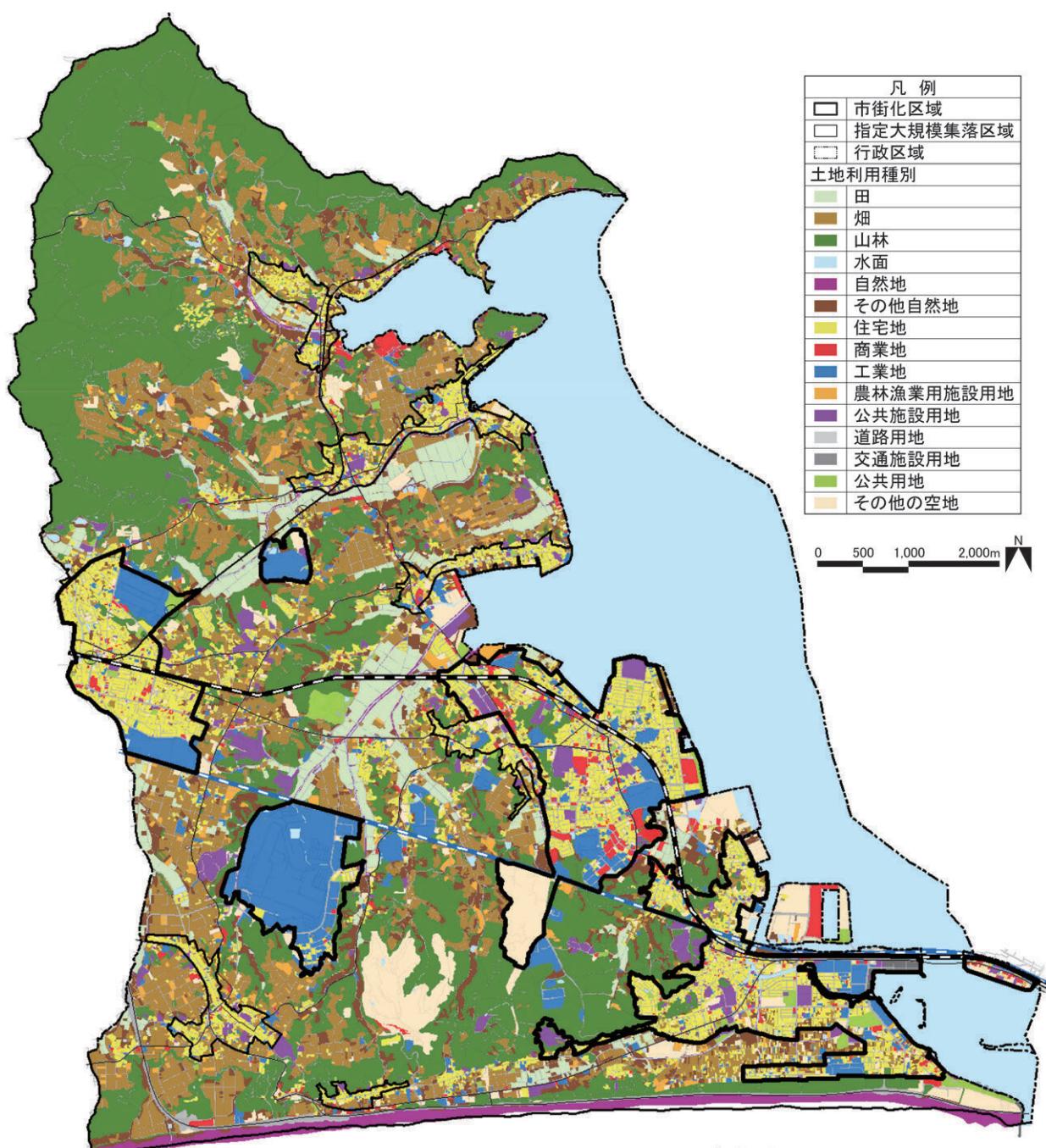


1-11 湖西市交通図

4. 土地利用

令和4年(2022)時点では、本市の69.9%で山林や農地、水面などの自然的土地利用がされており、残りの30.1%で宅地や公共・公益施設用地、道路用地などの都市的土地利用がされています。市全体で自然的土地利用の割合が大きく、豊かな自然環境が広がっています。

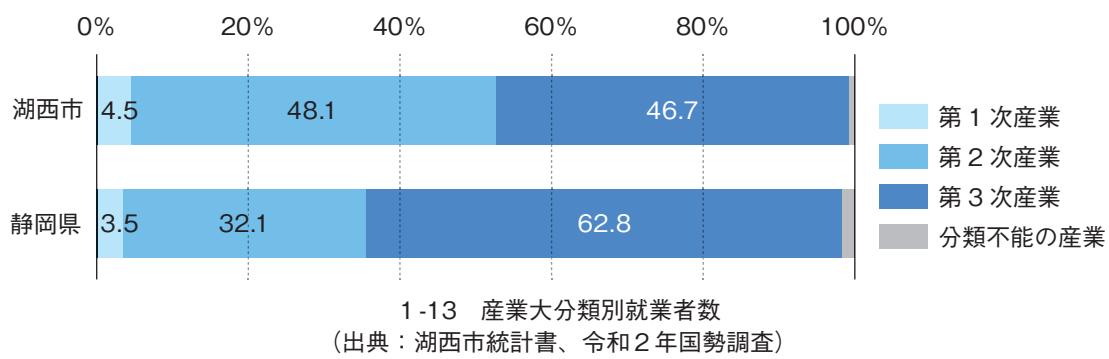
住宅地や商業地、工業地は、東海道本線の駅の周辺に分布しています。また、大規模工場は東海道新幹線の沿線に多く位置しています。一方で、東海道本線の駅から離れた地区では、住宅地や商業地の広がりは局所的で、田畠や山林などの自然的土地利用が大部分を占めます。住宅地が少ない地区は人口減少がより顕著で、今後、文化財の扱い手不足が顕在化すると予想されます。



1-12 令和4年時点の土地利用現況図
(出典：令和4年度 都市計画基礎調査)

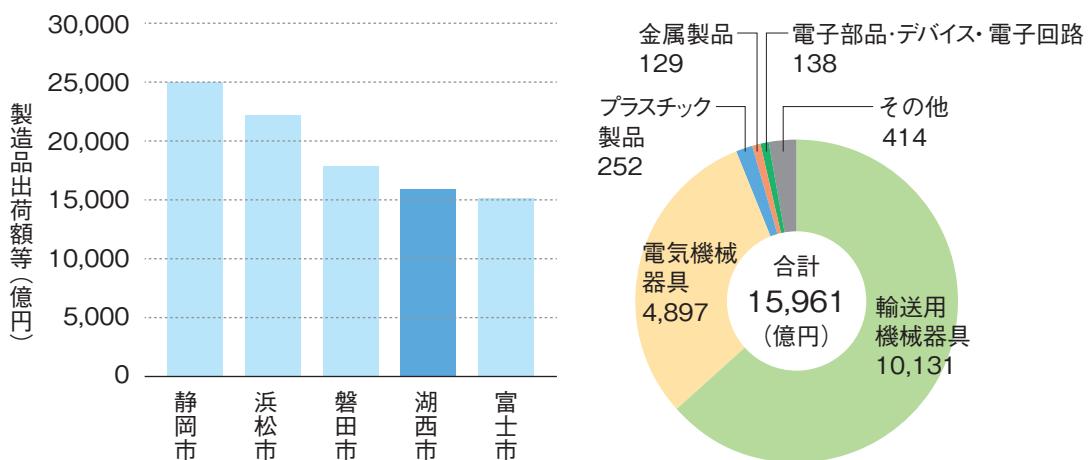
5. 産業

令和2年(2020)10月1日時点の産業大分類別就業者数の割合は、第1次産業(農林業・漁業)が4.5%、第2次産業(建設業、製造業・鉱業)が48.1%、第3次産業(第1次・第2次産業以外の業種)が46.7%、分類不能の産業が0.7%です。同年の静岡県全体の割合は、第1次産業が3.5%、第2次産業が32.1%、第3次産業が62.8%、分類不能の産業が1.6%です。本市は県全体と比べて、第2次産業に就業している人の割合が高く、モノづくりが盛んな町です。



(1) 工業

静岡県臨海部に交通の便を生かして発展した東海工業地域が広がっています。これに含まれる本市も機械工業が盛んです。本市の製造品出荷額の上位は、輸送用機械器具と電気機械器具です。比較的大規模な工場は主に新居地区、鷺津地区、岡崎地区及び白須賀地区にあり、自動車の部品製造や組立を行っています。令和4年(2022)の本市の製造品出荷額は約1.6兆円で、静岡市、浜松市、磐田市に次いで県内4位です。



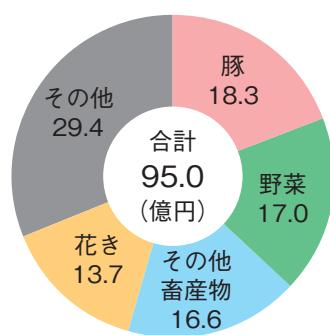
(2) 農業・漁業

令和5年(2023)の農業産出額は95.0億円です。内訳は、静岡県で一番の生産量を誇る豚が18.3億円で最も多く、次いで野菜が17.0億円、その他畜産物が16.6億円、花き類が13.7億円です。

白須賀地区は、本市で最も農業が盛んな地区です。台地上の赤土と広い耕作地を活かした野菜の生産が盛んで、露地栽培でキャベツやジャガイモなどが、ハウス栽培でセルリーやエンドウマメなどが生産されています。鷺津地区や入出地区は花き類の栽培が盛んです。特にコデマリは本市が日本一の産地で、国内シェアの約8割を占めています。知波田地区では湖西連峰の斜面を活かしたミカン栽培が主に行われています。

漁港は鷺津港〔鷺津地区〕と入出港〔入出地区〕の2か所があり、主にアサリ、スズキ、タイ、ヒラメ、エビ、カニなどが水揚げされています。また、浜名港〔新居地区〕ではシラスやアサリ、カツオなどの海産物が水揚げされています。

浜名湖の豊かな環境を利用したウナギやカキ、海苔の養殖も盛んに行われています。一方で、平成21年(2009)頃まで大量に漁獲されていたアサリの水揚げ高は、近年の自然環境の変化により大きく減少しています。



1-15 農業産出額

(出典：令和5年市町村別農業
産出額(推計))

6. 観光

本市の観光交流客数は、令和元年度(2019)に677,299人を記録して以降、新型コロナウイルス感染症の影響で大きく減少しましたが、近年は再び増加傾向を示しています。中京圏からの日帰りの観光客が多く、宿泊する観光客の数は少ない点が特徴です。主な観光資源は浜名湖と東海道で、これらに関連する観光スポットは新居地区に集中しています。また、湖西連峰での登山も人気で休日は多くの登山客が訪れます。

また、浜名湖周辺の効果的な情報発信や観光ブランド化を図るため、本市は浜松市や(公財)浜松・浜名湖ツーリズムビューロー、湖西・新居観光協会と連携し、観光事業を展開しています。



1-16 観光交流客数推移
(出典：第3次湖西市観光基本計画)

7. 文化財関連施設

常時文化財を展示している施設は4か所あり、いずれの施設も東海道の歴史や文化に関する展示を行っています。

特別史跡である新居関跡 [新居地区] では、敷地内の新居関所史料館で、歴史と宿場文化に関する展示を有料で公開しています。新居関跡の約200m西側に、新居宿旅籠紀伊国屋資料館と小松楼まちづくり交流館があります。新居宿旅籠紀伊国屋資料館は明治時代の旅籠建物を平成13年(2001)に解体修理した建物で、市の有形文化財(建造物)に指定されています。建造物の内部や旅籠に関する展示を有料で公開しています。小松楼まちづくり交流館は大正時代の芸妓置屋兼小料理屋の建物を改修した建物で、国の登録有形文化財です。建造物の内部や関係資料を無料公開しています。白須賀地区にある白須賀宿歴史拠点施設(おんやど白須賀)は、旅行者の休憩施設です。館内で江戸時代の白須賀宿に関する展示を無料で公開しています。

文化財の収蔵施設は、北部多目的倉庫 [知波田地区] と民具倉庫 [鷺津地区] があります。その他の公立の文化施設としては、中央図書館と新居図書館があります。

私立の文化財関連施設は、豊田佐吉記念館 [鷺津地区] があります。管理は所有者である豊田佐吉記念館保存会が行い、無料で公開されています。また、敷地は豊田佐吉邸として市の史跡に指定されています。



1-17 新居関所史料館



1-18 おんやど白須賀



1-19 小松楼まちづくり交流館



1-20 湖西市立中央図書館



1-21 文化財関連施設位置図

第3節 歴史的背景

1. 通史

(1) 縄文時代(1万数千年前～紀元前4世紀)

弥生時代(紀元前4世紀～3世紀後半)

古墳時代(3世紀後半～7世紀)

【人々の生活のはじまりと浜名湖】

本市では、縄文時代から人々が生活を始めました。縄文時代の人々は、食料入手しやすい場所に集落をつくり、土器や石器、骨角器(動物の骨を削って作った道具)を使って生活しました。浜名湖の魚介類も多く採集しており、遺跡からは漁具が見つかっています。

最初期の遺跡は、郷北遺跡[新居地区]、寺川遺跡[新居地区]及び天白遺跡[新居地区]です。これらの遺跡は浜名湖の近くの丘陵上にあり、約7,000年前の土器や狩猟で使う矢じり、漁で使うおもり(石錘)が見つかりました。浜名湖湖底遺跡群[新居地区]からも、縄文時代の土器や骨角器の「もり」が多数見つかりました。浜名湖湖底遺跡群は、縄文時代や弥生時代の集落が、のちの時代の地形変動により浜名湖の底に沈んだ遺跡です。浜名湖湖底遺跡群では縄文時代の漁具だけでなく、奈良時代や鎌倉時代の陶器でできたおもり(陶錘)も見つかっています。このことから、本市の人々は縄文時代以来、浜名湖で漁を行っていたことが分かります。

【稻作の始まりと白須賀の銅鐸】

弥生時代になると、日本列島の広範囲に稻作が広まりました。本市では遅くとも紀元前1世紀には稻作が行われていました。弥生時代の遺跡の多くは河川沿いに分布しています。特に笠子川沿いの丘陵上にある吉美中村遺跡[鶯津地区]や、大谷川沿いの一里田遺跡[新居地区]では弥生土器が多く見つかりました。また、弥生時代は銅鐸という青銅器を使った祭りが行われており、鍛冶ヶ谷遺跡[白須賀地区]で江戸時代に銅鐸の破片が出土しています。



1-22 湖底遺跡出土の漁具
上：骨角器(もり)
下：石錘



1-23 一里田遺跡出土弥生土器

【古墳の築造】

古墳時代は東北地方から九州地方まで、各地で有力者（豪族）の墓である古墳が築かれました。周辺の浜松市や磐田市には巨大な前方後円墳を築くほどの力をもった豪族がいました。一方で、本市にそのような人々はおらず、直径 20 m以下の小規模な円墳が大半を占めます。

本市で最も古い古墳は利木古墳 [大知波地区] です。5世紀後半に築かれた古墳で、人や動物の形をした埴輪（形象埴輪）や、筒状の埴輪（円筒埴輪）が出土しました。

鷲津地区の笠子川沿いや、岡崎地区の湖西連峰で多くの古墳が築かれました。特に、神座古墳群 [知波田地区] や梅田古墳群 [岡崎地区] は、小さな円形の古墳（円墳）が密集しています。



1-24 神座古墳群発掘調査時写真



1-25 古墳群・古窯跡群の分布範囲図(消滅したものも含む)

これらは群集墳と呼ばれ、本市では6世紀前半から7世紀中頃まで形成されました。また、弥生時代と同様に、古墳時代の人々も河川の近くで生活をしていました。古墳時代の集落遺跡は笠子川や今川、大谷川の近くで見つかっています。

【須恵器生産の開始】

5世紀の後半から須恵器の生産が行われました。これが「湖西窯跡群」の始まりです。須恵器とは、丘陵の斜面をトンネル状に掘った窯で焼き上げた灰色で硬い土器のことです、朝鮮半島に起源を持ちます。湖西窯跡群は6世紀中頃まで須恵器の他に埴輪も生産しましたが、その後は須恵器だけを生産しました。須恵器窯は6世紀後半まで笠子川沿いの丘陵部でしか築かれず、後の時代と比較すると生産は小規模なものでした。

(2) 飛鳥時代（6世紀末～710）

奈良時代（710～794）

平安時代（794～1185）

【行政区画】

飛鳥時代と奈良時代は国家の仕組みが整えられた時代です。7世紀中頃に国・評・里という行政区画が置かれ、中央集権的な政治体制ができました。その後、大宝元年（701）に国・郡・里（後に郷と改称）に改められ、それぞれの長として、国司・郡司・里長（郷の場合は郷長）が任命されました。また、地方統治の拠点として国府と郡家が置かれました。

本市は、当初は遠江国渕評（敷知郡）に属しました。その後、郡の領域が再編されたことで、遅くとも天平12年（740）までに遠江国浜名郡に組み替えられました。浜名郡の下には8つの郷が置かれ、本市には大神郷、駅家郷及び新居郷の3郷がありました。このうち新居郷は承平年間（931～937）までに消滅し、大神郷に再編されました。これは新居郷内の人口減少や、浜名湖周辺部の地形変化などが要因として考えられています。

【須恵器生産の拡大と衰退】

飛鳥・奈良時代の本市では、湖西丘陵が窯の構築に適した地形であったことや、湖西丘陵から良質な粘土が採れること、浜名湖の水運を利用して製品の出荷ができたことから大量の須恵器が生産されました。笠子川沿いの丘陵部に限られていた窯の分布は、飛鳥時代に太田川沿いや古見川以東、境川以西（愛知県豊橋市）の丘陵に広がりました。さらに奈良時代の前半になると、窯の分布密度が濃くなりました。長期間にわたり継続して須恵器の生産が行われた結果、市内にたくさんの窯跡が残されました。この時代に湖西窯で生産された須恵器は、本市から遠く離れた場所でも見つかっています。特に東日本の太平洋沿岸の遺跡から、湖西窯産の須恵器が多く見つかっています。



1-26 奈良時代の湖西窯産須恵器

須恵器生産の拡大に伴い、製品の選別や保管、出荷を一手に担う拠点が笠子川に面した丘陵の先端に置かれました。これは、笠子川の周辺が古墳時代から続く須恵器生産の中心で、生産した須恵器の運搬に笠子川と浜名湖の水運を利用していったためです。最も大きい拠点は吉美中村遺跡 [鷺津地区] で、住居跡や複数の倉庫跡、廃棄された大量の須恵器が見つかっています。

このように、飛鳥時代から奈良時代にかけて大規模な窯業が行われましたが、奈良時代の後半にはそれまで湖西窯産須恵器を使用していた地域にも窯が築かれるようになり、湖西窯産須恵器の需要が激減しました。湖西窯での須恵器生産の規模は急激に縮小し、平安時代の初めには生産されなくなりました。

【官道の整備と浜名橋】

飛鳥時代から奈良時代にかけて、都と地方をつなぐ官道が整備されました。官道には約16kmごとに駅家 (馬の乗り継ぎを行う施設) が置かれました。本市には、畿内から太平洋沿岸諸国を経て東国に至る東海道が整備され、駅家として猪鼻駅 [新居地区] が置かれました。

現在の橋本 [新居地区] はかつて浜名川に面しており、奈良時代には既に集落が開かれています。平安時代に橋本に浜名橋が架橋されました。浜名橋は貞觀4年 (862) には既にあり、長さ約170m、幅7m、高さ5mに及ぶ巨大な橋でした。その後、浜名橋は何度も修復と再建を繰り返しながら、15世紀まで東海道の交通を支えました。また、浜名橋は交通の要衝としてだけでなく、景勝地としても有名な場所でした。藤原定家が「影たえてしたゆく水もかすみけりはまなの橋の春の夕暮」という歌を詠んだように浜名橋の美しい景色や様子が、数多くの和歌や旅行者の日記に記されています。

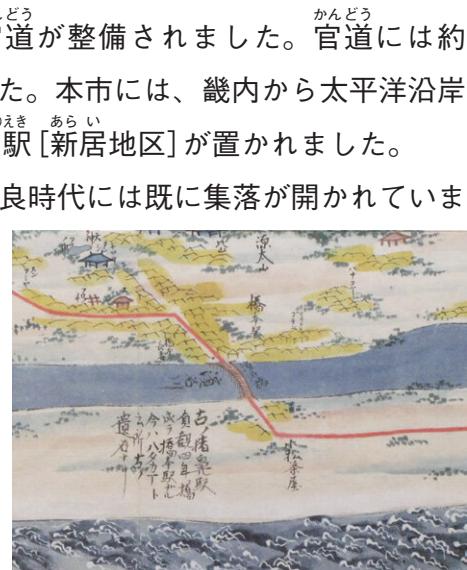
【古代の神社】

奈良時代に国家が整備されると全国の神社が組織化されました。延長5年 (927) の『延喜式神名帳』に全国に存在した代表的な神社が記されており、これらの神社は式内社と総称されます。浜名郡には5つの式内社があり、このうち本市には大神神社と角避比古神社の2社がありました。

大神神社は現在の二宮神社 [新居地区] の前身の神社で、その名前から大神郷にあったことが分かります。角避比古神社は後世の津波で流失した後、再建されなかったため、後身の神社や所在地の詳細は分かりません。しかし、新居町浜名地区周辺にあり、現在の湊神社 [新居地区] が角避比古神社の流れを汲んでいると伝えられています。



1-27 地中から見つかった窯跡
(谷上第2地点窯)



1-28 浜名橋を描いた絵図
(遠江国浜名湖今切湊口俯瞰図)
江戸時代終わり頃の資料。浜名川を南北にまたぐ浜名橋が描かれる。

【真言宗寺院と大知波峠廃寺の繁栄】

平安時代の初め、最澄により天台宗が、空海により真言宗が開かれました。どちらも加持祈禱と呼ばれる儀式により国家と社会の平穏を祈ることが特徴で、天皇や貴族の信仰を広く集めました。

愛知県豊橋市にある普門寺は真言宗の寺院です。平安時代は東海地方でも屈指の規模を誇る寺院でした。普門寺の影響で、平安時代以降の本市に真言宗の寺院が多数建てられました。本興寺 [鷲津地区] や蔵法寺 [白須賀地区] は、創建当初は普門寺の末寺（本山の支配下にある寺）で、真言宗の寺院でした。また、応賀寺 [新居地区] や本巣寺 [新居地区]、東福寺 [新居地区] も、真言宗の寺院として創建されました。

この時代の仏教の様子を知るうえで、最も重要な遺跡が大知波峠廃寺跡 [知波田地区] です。大知波峠廃寺跡は、平安時代後半の10世紀中頃から11世紀中頃まで湖西連峰の山中にあった山寺の遺跡です。発掘調査で7棟の堂跡や石垣が見つかっており、大規模な山寺であったことが分かっています。

湖西連峰は三河国との国境を形成する山々として、奈良時代にはすでに信仰の対象でした。そのような靈山に、平安時代に大知波峠廃寺跡となる山寺がつくられ、ふもとの人々の信仰を集めたのです。



1-29 大知波峠廃寺跡

（3）鎌倉時代（1185～1336）

室町時代（1336～1573）

安土桃山時代（1573～1600）

【莊園の誕生】

奈良時代は、全ての人民と土地は天皇の所有物であるとする公地公民制のもと支配が行われましたが、平安時代後半になると中央の有力者は自らの権威を背景に、全国各地に莊園と呼ばれる私有地を増やしていました。鎌倉時代から室町時代の本市には、高野山領の那賀莊（現在の新居地区中之郷周辺）や東北院領の吉美莊（現在の鷲津地区吉美周辺）、南禅寺領の新所郷（現在の新所地区周辺）、臨川寺三会院領の内山郷（現在の新居地区周辺）など、大寺院や有力者の莊園がありました。

また、莊園の成立とともに郡や郷の範囲も変化し、白須賀地区を除いた本市全域が、再び敷知郡の一部となりました。

【中世窯業の展開】

須恵器の生産は平安時代の初めに衰退したものの、平安時代後半の12世紀初めから再び窯が築かれはじめました。この時代の窯業は愛知県の渥美半島から導入されたもので、陶土や製品の形に共通点が多いため、本市と渥美半島の窯跡を総称して「渥美・湖西中世窯」と呼んでいます。

12世紀は、山茶碗と呼ばれる碗や小皿、壺、甕などの陶器に加えて、特注品である瓦や陶製五輪塔（五輪塔の形をした経容器）を生産しました。13世紀になると古瀬戸窯や常滑窯に押され、山茶碗と小皿を中心とした小型製品の生産へと転換しましたが、競合に敗れ、14世紀初めに衰退しました。

【橋本宿の繁栄と衰退】

鎌倉幕府の成立により都と鎌倉を結ぶ東海道の重要性が増し、往来する人が増加しました。また、物資の輸送や軍事の面においても重要であったため、東海道の整備が進みました。東海道沿いの各地で、旅行者に対して宿泊施設や輸送用の人馬、旅行に必要な物資を提供する「宿」が形成され、地域経済の中心地となりました。

浜名橋のたもとにあった集落は、鎌倉時代には橋本宿と呼ばれるようになりました。橋本宿は東海道を通行する人々の拠点として繁栄しました。また、職人や商人のほか、弦や詩歌の技能を持った遊女が多くいたことが記録されています。鎌倉幕府の初代将軍である源頼朝は建久元年（1190）、橋本宿に宿泊しました。これがきっかけとなり、現在の新居地区周辺に源頼朝に関する言い伝えが数多く生まれました。また、室町時代の永享4年（1432）に室町幕府の6代将軍である足利義教が橋本宿に宿泊しました。

交通の要衝であった橋本宿は争いの舞台にもなりました。治承・寿永の乱（源平合戦）や、承久3年（1221）に後鳥羽上皇が起こした承久の乱の際は、橋本宿へ兵が派遣されました。また、建武2年（1335）に北条時行が起こした中先代の乱の際は橋本宿周辺が戦場となりました。

鎌倉時代から室町時代の終わりにかけて、橋本宿は浜名湖西岸地域の中心でした。しかし、浜名湖を往来する手段として渡船が用いられるようになったことや、明応7年（1498）から永正7年（1510）にかけて頻発した地震や津波、洪水により今切口ができることが影響し、16世紀前半までに橋本宿は衰退しました。その後は湖岸付近が渡船による往来の拠点として発展しました。

【武士による支配】

室町時代は、幕府により派遣された守護（守護大名）と呼ばれる有力武士が各地を支配しましたが、応仁の乱で幕府の権威が失われると、各地の有力者が実力で支配地域を広げました。

駿河国の守護であった今川氏親は、明応3年（1494）から文亀元年（1501）の間に遠江国（とおとうみのくに）の守護であった斯波氏を倒し、遠江国を自らの領国へ組み入れました。今川氏親は、三河との国境であった浜名湖西岸地域を特に重視しました。そのため、大永年間（1521～1528）に浜名湖の湖上交通の掌握と、国境防備の堅牢化を目的に宇津山城（うづやまじょう）[入出地区]を築城しました。



1-30 山口第17地点窯から出土した瓦



1-31 風炉の井
源頼朝が上洛した際、この井戸から汲んだ水で茶を沸かしもてなしたとの伝説が残る。

また、今川氏支配下の新居地区に、浜名湖を通行する船から通行料を徴収するための関所が置かれました。

永禄3年(1560)の桶狭間の戦いで今川氏親の孫にあたる今川義元が敗れた後、徳川家康は三河国の今川氏の領地へ侵攻し、永禄8年(1565)に三河国全域を支配下に置きました。今川義元の跡を継いだ今川氏真はこれに対抗し、浜名湖沿岸部の防備を進めました。本市では、永禄4年(1561)以降に宇津山城の拡張や、妙立寺[鷺津地区]境内での境目城の築造が行われました。

永禄11年(1568)、徳川家康が遠江国へ侵攻し、永禄12年(1569)にその全域が支配下に置かれました。徳川家康も浜名湖周辺の土地を重視し、天正2年(1574)に今切渡船の船主に對して、特権を認める代わりに円滑な渡船運営を命じました。その後、豊臣秀吉が天下統一を果たすと、豊臣方の大名である池田照政が浜名湖西岸を支配しました。池田照政も徳川家康と同様に今切渡船を保護しました。

【中世の信仰】

平安時代から鎌倉時代にかけて真言宗の寺院が勢力を広げましたが、室町時代以降は鎌倉六宗(浄土宗、浄土真宗、日蓮宗、時宗、臨済宗、曹洞宗)が台頭し、本市で真言宗寺院の改宗や鎌倉六宗に属する寺院の創建が進みました。特に日蓮宗(法華宗)の活動が活発で、真言宗寺院として成立した本興寺[鷺津地区]は永徳3年(1383)に法華宗へ改宗しました。その後、今川家の家臣であり三河国西郡(現在の愛知県蒲郡市)周辺を支配した鵜殿氏に厚く保護され、本興寺は大きく発展しました。また、妙立寺[鷺津地区]は至徳3年(1386)に日蓮宗の寺院として開かれ、発展しました。

女河八幡宮[新所地区]の特殊神事と二宮神社[新居地区]の流鏑馬神事は、鎌倉時代から室町時代にかけて成立しました。前者は南朝方の武将として活躍した宗良親王が、延元2年(1337)に内藤延国という人物に命じて奉納させたことが始まりと伝えられています。後者は元亀元年(1570)の姉川の戦いの際、徳川家康方の軍勢として戦った柴田七九郎という人物が、神馬や矢、馬具を奉納したこときっかけに始まったといわれています。



1-32 宇津山城遠景



1-33 女河八幡宮特殊神事

(4) 江戸時代(1600～1868)

【行政区画の変遷】

正保元年(1644)に作成された『正保郷帳』によると、当時本市に20村があり、その全てが幕府領でした。その後、村の数は24村に増加しました。元禄10年(1697)に幕府領が旗本(幕府直属の家臣)に分け与えられたことで、全24村のうち新居関所周辺の6村と白須賀宿周辺の2村を除いた16村が、新たに旗本領(幕府直属の家臣団の領地)となりました。

元禄15年(1702)に新居関所の管理が幕府から三河国吉田藩(現在の愛知県豊橋市周辺)へ移されると、同年に新居関所周辺の6村が吉田藩の領地に編入されました。宝永2年(1705)にさらに8村が編入され、計14村が吉田藩領となりました。これらの村々は新居付村と呼ばれました。その後、新田開発や分村が進み、幕末の時点で31村がありました。なお、江戸時代を通じて白須賀村及び境宿村だけが浜名郡に属し、それ以外の村は全て敷知郡に属しました。

1-34 明治2年時点の領地支配

年	郡	天領	旗本領	吉田藩領	浜松藩領
明治2年 (1869)	敷知郡	新所村新田 岡崎村新田 東市場村 【計3村】	鷺津村 古見村 新所東方村 新所西方村 (一部吉田藩領) 中川尻村 【計5村】	西市場村 西川尻村 坊瀬村 山口村 岡崎村 梅田村 新居宿 橋本村 中之郷村 内山村 松本新田 大倉戸新田 弥太郎新田 松山新田 【計14村】	南川尻村 神座村 太田村 大知波村 利木村 横山村 入出村 【計7村】
	浜名郡	白須賀宿 境宿村 【計2村】	—	—	—

※赤字…元禄15年(1702)に吉田藩へ編入した村

※青字…宝永2年(1705)に吉田藩へ編入した村

※松本新田村…明和6年(1769)に吉田藩へ編入

【新居関所の成立と展開】

慶長5年(1600)に関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、東海道交通の要衝であった今切口の西側に新居関所(今切関所)を設置しました。新居関所は通過する人や鉄砲の検閲を行い、特に江戸方面へ入ってくる鉄砲と江戸から出でていく女性を厳しく取り締まりました。前者は江戸の治安維持のために、後者は人質として江戸に置かれている大名の妻子が自らの国へ帰ることを防ぐために行われました。

新居関所の構内には、舞坂への渡船（今切渡船）の船着き場がありました。また、通行に使用する馬や人足、今切渡船を手配する施設（船会所）も置かれていました。これらの施設が関所の構内に置かれている例は他に無く、新居関所の特徴でした。

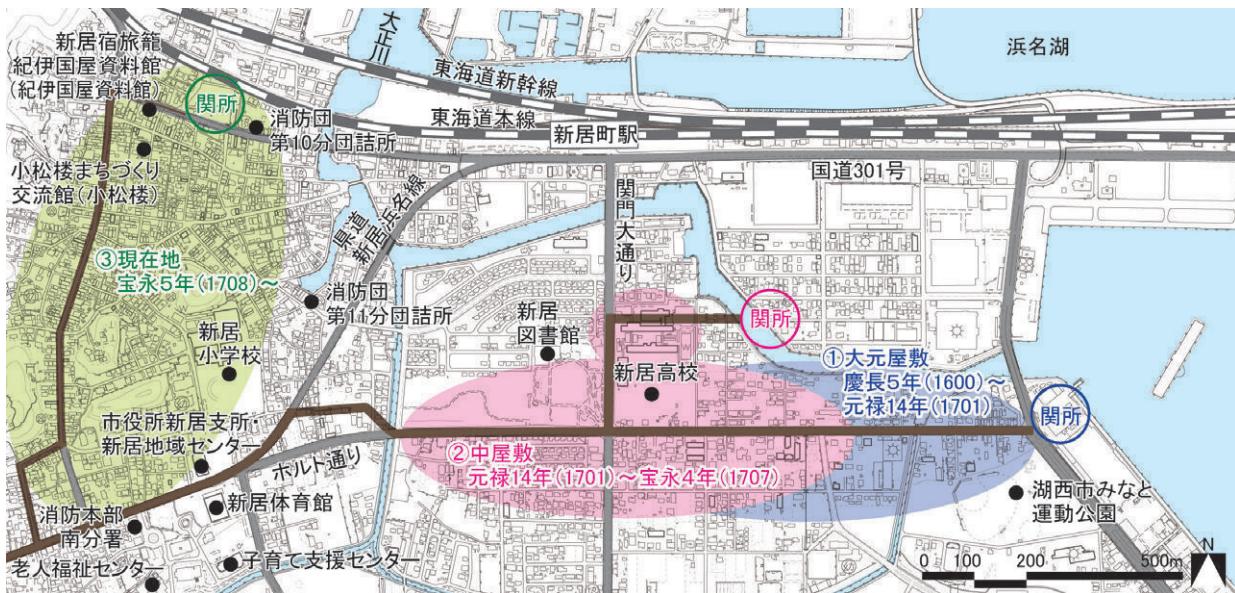
設置当初の新居関所は、現在の湖西市みなど運動公園の北側付近にありました。その後、元禄12年（1699）の暴風雨とそれに伴う高潮被害のため、元禄14年（1701）に現在の新居高校付近へ移転し、翌年に関所の管理が幕府から吉田藩へと移されました。しかし、宝永4年（1707）の宝永地震により再び新居関所が大破したため、宝永5年（1708）に現在地である泉町付近へ再度移転しました。関所建物は嘉永7年（1854）の安政東海地震で再び倒壊したため、安政2～5年（1855～1858）に建て替えられました。現在の新居関跡に残る関所建物はこの時のものです。江戸時代の関所は明治2年（1869）に廃止されましたが、新居関所の建物は学校や町役場として利用され続けました。現在は新居地区のシンボルとして市民に愛され、新居関所を核に周辺地区の景観形成が行われています。



1-35 新居関跡



1-36 新居関所での検閲を描いた浮世絵（「東海道五十三次 荒井」葛飾北斎）



1-37 関所・宿場移転図

【東海道の整備と宿場】

江戸時代の初期、徳川家康により東海道の整備が行われました。松並木の街路樹や1里(約3.9km)ごとに設置された一里塚の整備もこの時期に始まりました。

とくがわいえやす
徳川家康は東海道の交通を円滑にするため、慶長6年（1601）から段階的に各所へ宿場を設置しました。本市では、慶長6年（1601）に現在の湖西市みなと運動公園付近に新居宿が、潮見坂下の元宿と呼ばれる場所に白須賀宿が設置されました。新居宿は先述の高潮や地震により、新居関所とともに2度移転しました。また、宝永4年（1707）の宝永地震の際に白須賀宿も壊滅し、潮見坂の上に移転しました。

宿場は幕府の公用のための人馬を常備することや、幕府の物資を無償で次の宿まで送り届ける「伝馬役」が義務付けられていきました。これらの義務の代わりに、屋敷地にかかる税の免除や旅人を宿泊させる権利、公用以外の物資を有償で運搬する権利を得ていました。さらに、新居宿ではこの特権に加えて、今切渡船の運営を独占する権利が与えられ、江戸時代を通じて宿場の大きな収入源でした。一方で、対岸の舞坂宿にも今切渡船の渡船場がありましたが渡船運営には参画できず、宿場の財政は困窮しました。そのため江戸時代の舞坂宿で、今切渡船への参画を目指した運動が度々行われましたが、新居宿の反対により実現しませんでした。

宿場には大名が宿泊する本陣及び脇本陣、庶民の宿泊が可能な旅籠や木賃宿といった宿泊施設があり、旅行者の拠点として機能しました。新居宿と白須賀宿の人口はどちらも江戸時代の終わり頃に3,000人前後を数え、百姓や漁師を中心に、職人や商人、医師といった様々な職業の人々が暮らしていました。特に新居宿には、渡船や輸送船に従事する船守や船を修理する船大工など、船に関係する職業の人々が多く居住していました。

【江戸時代の生業】

江戸時代の主な生業は稻作でしたが、本市の村は栄養と水の乏しい台地や砂地にあったものも多く、このような村では畑作が広く行われました。浜名湖沿岸の人々が畑作をするうえで重要なのが「藻草」です。藻草とは、浜名湖の湖底に自生するアマモ類やコアマモ類、アオサ類のこと、乾燥させて畑の肥料にしました。また、販売により貴重な収入源にもなりました。藻草を採取できる水域は村ごとに定められていましたが、水域の境界や藻草取りのルール、他村の人間による盗み採りを巡り、近隣の村同士で何度も紛争が生じました。

また、遠江では綿花の栽培が古くから行われており、江戸時代は全国でも有数の産地でした。それを原料とした機織りも行われており、遠州木綿として広く知られていました。

遠州灘と浜名湖の沿岸部では漁業が行われました。特に盛んだったのが入出村で、他の村の生業が農業中心であったのに対し、入出村は漁業を中心としていました。入出村の漁期は他村の漁が禁止されていたことに加えて、浜名湖北岸の広い範囲で地引網漁（六帖網）を行う



1-38 潮見坂を描いた浮世絵
(「東海道五十三次 白須賀」歌川広重)

特権が与えられていました。そのため、入出村の港に大量の魚が水揚げされ、これを求めて集まつた行商人や仲買人で賑わいました。一方で、浜名湖での漁における入出村の権限が大きすぎたことで、浜名湖沿岸の村との紛争が度々生じました。また、地引網漁が藻草を根こそぎ抜いてしまうため、そのことに不満を持った村とも紛争が生じました。

【宿場の文化】

江戸時代の新居宿と白須賀宿は人や物資が集中したことで浜名湖西岸地域の文化の中心となりました。旅籠や資産家の自宅で、学問や和歌、俳諧などの文化活動が行われました。また、古典を通じて日本の古代文化を明らかにしようとする国学が発展しました。白須賀宿の国学者である夏目甕麿は、自宅を拠点に国学書の出版活動を行い、国学の普及と発展に努めました。

吉田藩から派遣された関所役人による教育活動が行われ、人々に文化的な素養が備わったことも、新居宿で文化活動が盛んに行われた理由の一つです。特に、安政3年（1856）から慶応2年（1866）まで関所役人を勤めた山本忠佐は住民の教育に熱心で、10年間で約100名の住民が門人となりました。

新居関所の存在は、人々の生活文化にも影響を与えました。その最たる例が婚姻です。本市の女性が嫁ぐ際、浜名湖の東岸地域へ嫁入りすると帰省のたびに関所通行の手続きが必要となりました。そのため、嫁ぎ先は浜名湖西岸の村々や三河方面に集中しました。これにより、本市では方言や慣習などの面で、浜名湖の東岸地域とは異なる文化が形成されました。新居地区を象徴する祭礼として現在も盛んに行われている諏訪神社奉納煙火 [新居地区] は、江戸時代に吉田藩の影響を受けて生まれた文化の一つです。

江戸時代は、各地区で秋葉講という集団が組織され、秋葉山への参拝や秋葉灯籠の建立が行われました。秋葉灯籠は本市の各地に建てられましたが、建物が密集し火事が起りやすかった新居宿の周辺で特に多く建てられました。



1-39 伝夏目甕麿肖像画



1-40 新居宿内の秋葉燈籠

(5) 明治時代（1868～1912）

大正時代（1912～1926）

昭和時代（戦前）（1926～1945）

【行政区画の変遷】

明治時代（1868～1912）における行政区画の変遷を示した表が1-41です。明治元年（1868）に吉田藩領の新居宿と新居付村が新政府領へ編入され、幕府領、旗本領及び浜松藩領が駿府藩

領へ編入されました。しかし明治2年(1869)2月に、新居宿及び新居付村は再び吉田藩領へ戻されました。同年6月に、藩主の領地と領民を天皇へ返上させる版籍奉還が行われると、駿府藩と吉田藩はそれぞれ静岡藩と豊橋藩へ改名し、同年7月に全域が静岡藩領となりました。明治4年(1871)に廃藩置県の詔が発せられると、静岡藩は静岡県へと名称を改めました。その後、同年11月に浜松県が新たに設置されると、本市の村々はこれに属しました。

明治5年(1872)に浜松県下が82区に分けられ、それぞれの区ごとに戸籍が作成されました。この時、本市に浜松県第79～82区が設置されました。また、同年6月に県下を大区と小區に分ける大小区制が施行され、これらの区分けが行政区画として利用されました。大小区制は範囲を変えながら、明治22年(1889)まで続きました。

明治8～9年(1875～1876)は村々の合併が相次ぎました。明治8年(1875)に南川尻村、西川尻村及び中川尻村と、東市場村及び西市場村の計5村が合併し、吉美村が誕生しました。また、同時に東新所村と西新所村が合併し、新所村が誕生しました。明治9年(1876)に橋本村、まつやましんでんむら 松山新田村、まつもとしんでんむら 松本新田村、おおくらどしんでんむら 大倉戸新田村が合併し、浜名村が誕生しました。

明治9年(1876)に浜松県が静岡県に編入されると、県政の中心が県中部に移りました。これにより県西部の人々に様々な面で不都合が生じたため、同年に引佐郡、敷知郡及び浜名郡の40村が愛知県への編入を願い出ました。しかし、編入は実現しませんでした。

明治11年(1878)に郡区町村編成法が施行されると、大小区制は廃止され、代わって旧來の郡町村が行政単位として復活しました。白須賀宿及び境宿は浜名郡に属し、それ以外の村は敷知郡に属しました。

明治22年(1889)に、地方自治の確立を目指した市制・町村制が施行され、大規模な合併が行われました。敷知郡では知波田村、入出村、新所村、吉津村及び新居町が誕生し、浜名郡では白須賀町が誕生しました。施行された直後の同年4月に、敷知郡に属していた新居町、吉津村、新所村、入出村及び知波田村と、現在の浜松市にあった西浜名村と東浜名村の計1町6村が、浜名郡への編入を願い出ました。これは、同じ敷知郡でも浜名湖を隔てた東部とは人情や風俗が異なり、交通でも不便を強いられていたことが理由でしたが、認められませんでした。また、行政や経済、慣習の面から新居町域の村々と深いつながりがあった中之郷村が新居町ではなく吉津村に編入されたため、中之郷村の人々に様々な面で不都合を与えるました。

その後、明治29年(1896)に敷知郡が廃止されたため、本市の町村は全て浜名郡に再編成されました。また、明治38年(1905)には中之郷村民の悲願であった新居町への編入が実現しました。この中之郷村の編入をもって、昭和30年(1955)の湖西町の成立まで続く、本市の基本的な行政区画が完成しました。

1-41 行政区画変遷表

▼明治初期～9年の藩・県の変遷

		慶応4年 9月8日	明治2年 2月5日	明治2年 6月 (版籍奉還)	明治2年 7月	明治4年 7月14日 (廃藩置県)	明治4年 11月15日	明治9年 8月21日
旧湖西市域	天領	白須賀宿	駿府藩	駿府藩	静岡藩	静岡藩	静岡県	静岡県
		境宿村						
		東市場村						
	旗本領	鷺津村						
		古見村						
		新所東方村						
		新所西方村						
		中川尻村						
		南川尻村						
	浜松藩領	神座村						
		太田村						
		大知波村						
		利木村						
		横山村						
		入出村						
旧新居町域	吉田藩領	西市場村	新政府領	吉田藩	豊橋藩	豊橋藩	豊橋県	豊橋県
		西川尻村						
		坊瀬村						
		山口村						
		岡崎村						
		梅田村						
	新居町	中之郷村						
		新居宿						
		内山村						
		橋本村						
	新田村	松山新田村						
		松本新田村						
		大倉戸新田村						

▼明治5年～9年の大小区制による区画

	明治5年正月 (戸籍編成)	明治5年6月	明治6年2月	明治8年7月15日	明治9年8月21日 (浜松県が静岡県へ編入)
太田村	浜松県 79区	浜松県 第1大区 79小区	浜松県 第1大区 13小区	浜松県 第1大区 13小区	静岡県 第12大区 13小区
大知波村					
利木村					
横山村					
入出村					
鷺津村	浜松県 80区	浜松県 第1大区 80小区	浜松県 第1大区 12小区	浜松県 第1大区 11小区	静岡県 第12大区 12小区
古見村					
南川尻村					
西川尻村					
中川尻村					
東市場村					
西市場村					
新所東方村					
新所西方村					
岡崎村	浜松県 81区	浜松県 第1大区 81小区	浜松県 第1大区 10小区	浜松県 第1大区 9小区	静岡県 第12大区 9小区
土族屋敷					
梅田村					
神座村					
中之郷村					
新居宿					
内山村					
橋本村					
松山新田村					
松本新田村	浜松県 82区	浜松県 第1大区 82小区	浜松県 第1大区 11小区	浜松県 第1大区 10小区	静岡県 第12大区 10小区
大倉戸新田村					
坊瀬村					
山口村					
白須賀宿					
境宿					

▼明治8年以降の村々の合併



【湖上交通の発達】

明治5年(1872)、伊藤安七郎により新所西方村の小網屋と呼ばれていた場所に港が作られ、浜松との間に渡船が就航しました。この航路は明治9年(1876)から蒸気船が就航し、短時間で浜松との往来ができました。これにより利用客が急増し、港周辺には旅館や茶屋が立ち並びました。この発展をきっかけに、小網屋は「日の岡」という地名に改められました。しかし、明治21年(1888)の東海道本線の開通により鉄道が主な移動手段になったことで、渡船と日の岡は衰退しました。

明治40年(1907)に浜名湖巡航船株式会社[鷺津地区]が設立されたことで、湖上交通は再び活気を取り戻しました。浜名湖巡航船は、鷺津から入出及び新所方面への航路や、気賀及び三ヶ日方面への航路を運航しました。大正8年(1919)には新居汽船会社[新居地区]を吸収し、新居を起点に各地を結ぶ航路の運航を始めました。湖岸の道路が未整備だった時代、浜名湖巡回船は湖岸の人々の足として、また物資輸送のかなめとして重宝され、最盛期は年間46万人の人々を輸送しました。

【東海道本線の敷設と新居地区の埋立て】

明治19年(1886)、伊藤博文により東海道本線の着工が公表され、明治21年(1888)に浜松一豊橋間(浜松駅、馬郡駅、鷺津駅、豊橋駅)が開通しました。また、開通当初は単線だった浜松一豊橋間は、明治36~37年(1903~1904)に複線化され、輸送力が向上しました。

鉄道駅の設置後、農村だった鷺津地区に民家や商店が立ち並び、本市の中心地区へ成長しました。また、原料や工業製品の長距離輸送が可能になったことで、鷺津駅周辺に工場が数多く建設され、本市の工業化が急速に進みました。その一方で長距離移動の手段が徒歩から鉄道に変わったことで、東海道の交通量は激減し宿場は衰退しました。特に、白須賀宿は鉄道の沿線から大きく外れたため、交通の拠点としての機能が失われ、農業と漁業を中心とする地区に転換しました。

白須賀宿と同様に新居宿も一度は衰退しましたが、大正4年(1915)に新居町駅が建設されたことで再び発展し、新居宿は飲食店が立ち並ぶ歓楽街になりました。新居町駅の工事の際は、新居関跡から新居町駅までの約1kmの水面が細長く埋め立てられました。駅周辺の埋立ては昭和30年(1955)頃まで行われ、新居町の面積は埋立てが行われる前の約1.5倍に広がりました。また、埋立ての際に周辺の山が削られたことで、新居地区の景観は大きく変わりました。



1-42 浜名湖を航行中の巡航船



1-43 埋立て用土砂の掘削風景



1-44 前田川きょう渠

【製糸業の発展】

製糸業は蚕の繭から生糸を取り出す産業です。明治時代の初めは、手作業で生糸を取る座縄機が行われました。明治4～8年(1871～1875)に、大知波村の岡部重五郎により座縄器機の製造や製糸の方法が広められました。

明治26年(1893)に器械製糸(水力や蒸気機関を用いた機械による製糸)を行なう明進社製糸場[知波田地区]が建設され、明治30年代(1897～1906)に岡崎地区や鷲津地区、白須賀地区で多くの器械製糸工場ができました。また、明治37年(1904)に、本市初の大規模器械製糸工場である宮崎製糸鷲津工場[鷲津地区]が鷲津駅の西側にできました。

玉糸製糸も本市で盛んに行われました。玉糸製糸とは2匹の蚕がつくる大きな繭(玉繭)から糸を取り出す製糸方法のことです。明治25年(1892)に、二川の小渕志ちにより玉糸の商品化技術が確立され、豊橋周辺が全国でも有数の生産地になりました。東海道沿いに位置し、二川との交流があった新居地区と白須賀地区へ玉糸製糸が導入され、複数の工場ができました。

大正時代(1912～1926)になっても製糸業の好調は続きました。大正5年(1916)に鷲津駅南側に内山製糸鷲津分工場[鷲津地区]が、大正8年(1919)に新居町駅の西側に守田製糸工場[新居地区]ができました。これら大規模な製糸工場の設立をもって本市の製糸業は全盛期を迎えるました。

【綿工業の発展】

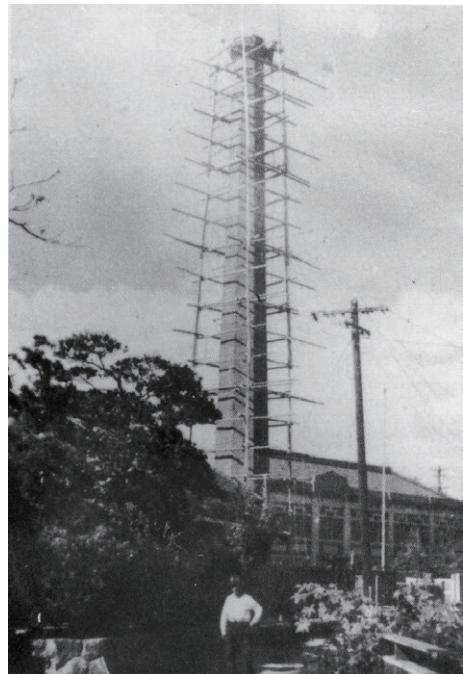
綿花から綿糸を紡ぐ紡績と、綿糸で布を織る織布を合わせて綿工業と呼びます。

明治時代初めの農村では、江戸時代以来の手動の機織り機を使った織布が行われていました。その後、明治29年(1896)に、吉津村出身の豊田佐吉が機械の力で動く機織り機(動力織機)を日本で初めて発明すると、農村で行われていた織布が工場での機械生産へ転換しました。明治33年(1900)に、本市初の動力織機を用いた工場である山口織布工場[鷲津地区]ができました。鷲津地区は鉄道による物資の運搬に適し、既に製糸工場が進出していたことから、地元資本の織布工場が多数できました。

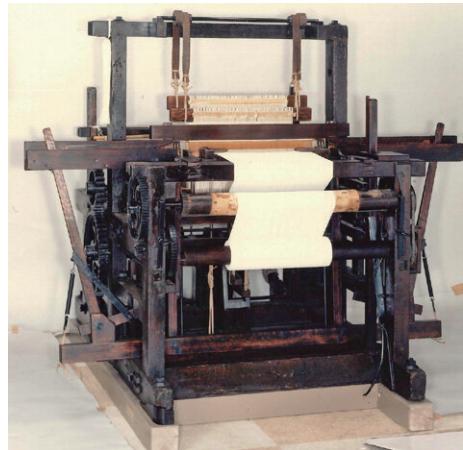
昭和4年(1929)に、地元資本の大規模紡織会社である



1-45 明進社製糸場(昭和初期)



1-46 宮崎製糸鷲津工場



1-47 木鉄混成動力織機

鷺津紡織株式会社 [鷺津地区] ができました。また、同年には鷺津駅北側に富士紡績株式会社鷺津工場 [鷺津地区] ができました。富士紡績は静岡県の小山町に本社を置く、全国でも有数の紡績会社であったため、新工場の誘致に際して浜松と激しい競争が行われました。最終的に、三方を浜名湖に囲まれた良い環境であり、かつ浜名湖の水を豊富に利用できることが決め手となり、表鷺津 [鷺津地区]への建設が決定されました。

鷺津紡織や富士紡績鷺津工場の設立をきっかけに、本市の綿工業は最盛期を迎えました。また、鷺津駅周辺は飛躍的に発展し、鷺津地区は工業の街として更に発展しました。

【生業の変化】

明治時代に鉄道の敷設や工場の設立が進んだことで、農村の生業も変化しました。

本市で特に盛んに行われたのが養蚕業です。養蚕は蚕の餌となる桑を栽培し、蚕を育て、繭を生産する一連の営みです。製糸工場の増加により繭の需要が拡大し、明治時代中頃から大正時代にかけて養蚕農家の数が急増しました。白須賀地区は特に養蚕が盛んで、明治44年(1911)には本市の繭の3割を生産しました。それまで開発が進んでいなかった上の原 [岡崎地区] でも、明治29年(1896)頃から開墾が進んで広大な桑畠ができ、人口も増加しました。昭和元年(1926)に本市を含む浜名郡は、静岡県で最も養蚕が盛んな地域になりました。

農産物は、米や麦といった穀物及び豆類のほか、大根、サツマイモなどが主に栽培されました。鉄道駅が設置された鷺津地区と新居地区は、長距離輸送の面で他の地区よりも有利であったため、キュウリやスイカ、ネーブルオレンジ、スイートメロン(なつめ瓜)などの多様な作物が栽培されました。また、明治時代の初めに大知波地区でミカン栽培が導入され、明治35年(1902)前後に地区全体へ普及しました。

新居地区と白須賀地区では、「琉球」と呼ばれる沖縄諸島周辺で栽培されていたイ草(シチトウイ)と、それを原料にした琉球畳表が農家の副業として生産されました。これらの生産は江戸時代から行われていましたが、明治20年代(1887~1896)の全国的な畳需要の拡大に伴い、生産量が急増しました。



1-48 山口織布工場



1-49 富士紡績鷺津工場



1-50 養蚕農家(昭和初期)



1-51 桑の収穫風景

遠州灘や浜名湖の沿岸部では漁業が主要産業の一つでした。白須賀地区では江戸時代の終わり頃から戦後直後まで地引網漁が盛んに行われました。新居地区ではカツオの一本釣りや地引網によるイワシ漁、シラス漁などが行われました。入出地区では、明治時代の初めに囲目網漁という漁法が確立され、大正時代からは大船団を組んで行う大囲目網漁が盛んに行われました。この漁法により大量のボラやスズキが水揚げされ、豊橋や東京へ出荷されました。また、漁業の隆盛に伴い仲買、水産加工業（佃煮）、船大工が入出地区に現れました。

ウナギやカキの養殖業が始められたのも明治時代です。本市のウナギ養殖は、明治18年（1885）に新居地区で初めて試みられ、明治時代の終わり頃から盛んになりました。新居地区や入出地区、新所地区に多数の養殖池が築かれ、大正時代には本市を含む浜名湖周辺が全国でも有数のウナギ生産地になりました。ウナギ養殖拡大の背景には、浜名湖の豊かな水資源や鉄道輸送の発達に加えて、養蚕業の副産物として得られる蚕の蛹を飼料として利用できたことがあります。

【道路・鉄道交通の発達】

大正時代から昭和時代の初めにかけて本市の道路整備が進みました。昭和4年（1929）に中浜名橋が、昭和7年（1932）に西浜名橋が竣工しました。これにより、新居地区と舞阪が国道1号でつながれ、徒歩や自動車で浜松へ向かうことが可能になりました。

道路網の整備に伴い自動車交通が発達しました。大正14年（1925）に本市で定期バスの運行が始まり、新居町駅から鷺津駅を経由し三ヶ日方面へと向かう路線と、入出村から神座〔知波田地区〕を経由し二川駅へ向かう路線が運行されました。昭和12年（1937）に日本国有鉄道により、新居町駅から白須賀地区を経由して豊橋駅へ向かう定期バスの運行が始まりました。白須賀地区に白須賀駅が置かれ、駅長とその家族が常駐しました。国鉄バスは鉄道駅から離れていた白須賀地区の住民にとって重要な交通手段で、主に浜松や豊橋方面への通勤や通学のために利用されました。

道路と同様に鉄道網の整備も行われました。昭和11年（1936）に国鉄二俣線（現在の天竜浜名湖線）が開通し、同時に新所原駅〔新所地区〕と知波田駅〔知波田地区〕が置かれました。国鉄二俣線は、東海道本線の新所原駅から浜名湖の北側を経由し、掛川駅までを結んだ単線の鉄道です。当初は一部区間のみの営業でしたが、昭和15年（1940）に掛川駅—新所原駅間の全線が開通しました。



1-52 地引網漁の作業風景（白須賀地区）



1-53 囲目網漁の作業風景（入出地区）

【織維産業の衰退と鉄工業及び機械工業の進展】

昭和4年(1929)の世界恐慌により、当時最大の市場であったアメリカへの生糸輸出が激減しました。また、化学織維の普及に伴い生糸自体の需要が減少しました。これらの要因により製糸業は急速に衰退し、中小工場の多くが姿を消しました。また、昭和12年(1937)に「製糸業法」に基づき全国で小規模工場が廃止され、本市の製糸工場は更に数を減らしました。

戦時中には、本市の機械製糸工場は⑨内山製糸鷺津分工場、守田製糸場及び宮崎製糸岡崎分工場の3か所だけになりました。これらの企業も、戦時中の業績不振や、国主導で製糸工場の統合が進められたことで、昭和18年(1943)までに全て消滅しました。守田製糸場は、日本蚕糸製造株式会社へ統合された後も落下傘用絹糸の製造を続けましたが、昭和東南海地震や艦砲射撃により工場が破壊され、終戦とともに閉鎖されました。これ以降、大きな製糸工場が築かれることはなく、本市の製糸業は終わりを迎えました。

製糸業の衰退に伴い、本市で盛んに行われていた養蚕業も、昭和初期から衰退していきました。戦争が始まると、食糧増産のため桑園は畑へと姿を変え、養蚕農家はさらに減少しました。

製糸業と同様に綿工業も戦争の影響を大きく受けました。富士紡績鷺津工場は、軍需品の生産を余儀なくされました。また、軍によって工場の一部が取り上げられ、兵器工場として利用されました。鷺津紡織は、飛行機の生産を行っていた中島飛行機へ工場の全てを貸したこと操業停止に追い込まれました。軍需工場となることを免れた工場も、戦時中には綿製品の生産が国の管理下に置かれたことにより衰退しました。

製糸業や綿工業が衰退した一方で、戦時中には鉄工業や機械工業が大きく成長しました。特に、製糸業や綿工業によって工業の地盤が完成していた鷺津地区には機械や兵器を生産する工場が数多くできました。

(6) 昭和時代(戦後)(1945~)

【戦後の工業】

綿工業は戦時に下火となりましたが、戦後には富士紡績鷺津工場や鷺津紡織を筆頭とする織維工場が復興しました。遠州紡績[鷺津地区]や新日本紡績[新居地区]といった工場の新設も相次ぎ、戦後しばらくは再び綿工業が産業の中心になりました。また、戦時に誕生した鉄工場や機械工場は、戦争の終結とともに平和産業へと転換し、乾電池や通信機、自動車部品などを製造しました。

その後、昭和25年(1950)から始まった朝鮮戦争をきっかけに、本市の鉄工業や機械工業が大きく成長しました。トヨタ自動車や日産自動車へ部品を供給する大工場や、これらの大工場へ部品供給を行う中小工場が増加し、自動車工業が急速に発展しました。織維工場よりも成長が見込める機械工場への転換も相次ぎました。

昭和30年代(1955~1964)には、全国的な自動車需要の増加や、湖西町と新居町が企業誘致を積極的に進めたことにより、本市の自動車工業はさらに成長しました。新居町駅の東に位

置する向島地区では工場用地の整備が進み、数多くの工場が進出しました。昭和40年代(1965～1974)には道路整備の進展や高速道路の開通により、物流の中心が鉄道からトラックに変わりました。道路や工業用水の整備も進み、それまで開発が進んでいなかった丘陵部を中心に工場用地の造成が盛んに行われました。昭和45年(1970)には鈴木自動車工業株式会社湖西工場 [白須賀地区] (現スズキ株式会社湖西工場) が建設され、本市の自動車工業はさらに発展しました。

一方で、戦後直後に産業の中心を担った綿工業は、昭和40年代(1965～1974)から徐々に衰退していきました。鷺津地区の発展のきっかけとなった富士紡績鷺津工場は平成12年(2000)に閉鎖され、跡地は住宅街となりました。

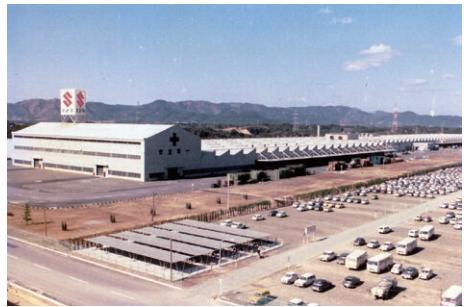
昭和58年(1983)に鈴木自動車工業の湖西第2工場が建設されました。この建設に合わせて、昭和55～60年(1980～1985)に東笠子土地区画整理事業が進められ、鈴木自動車工業の協力企業が多く進出しました。その後も丘陵部で工場用地の造成が行われ、自動車産業に携わる工場や企業が相次いで進出しました。令和6年(2024)にはトヨタバッテリー新居工場が開業するなど、現在も大規模工場の進出は続いています。

【戦後の農業】

昭和21～29年(1946～1954)の内浦湾干拓事業 [入出地区] や、昭和22～30年(1947～1955)の大原開拓事業 [知波田地区] など、戦後直後の本市では耕地の拡大が進みました。

花き栽培は、戦後直後の知波田地区で行われ、昭和24年(1949)からはコデマリの生産が始まりました。その後、知波田地区と交流の深かった入出地区にも花き栽培が広がりました。

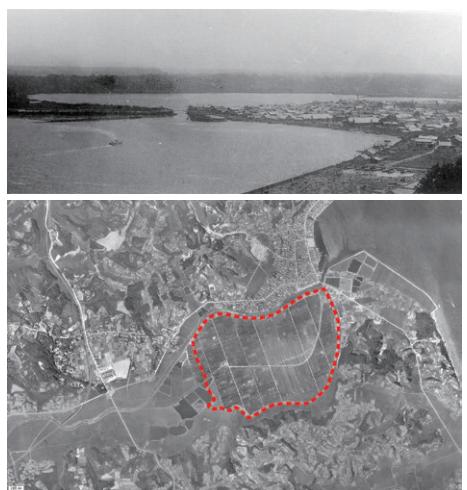
昭和40年代(1965～1974)は、農業の近代化が進みました。昭和39～41年(1964～1966)は、ほ場整備(小規模かついびつな形をした田畠を、広大な田畠へ区画整理すること)やミカン畠の造成が行われました。また、ライスセンターやミカン集荷場養豚センターの建設が行われました。昭和37～43年(1962～1968)に湖西用水が整備され、旧湖西市へ農業用水が配水されました。台地上に位置していたために渇水に悩まされてきた地区へ、水が安定的に供給されたことで、多様な作物が生産されるようになりました。同時期にビニールハウスを用いたハウス栽培



1-54 操業当初のスズキ株式会社湖西工場



1-55 トヨタバッテリー新居工場



1-56 内浦湾の干拓地

上：干拓前の内浦（写真奥）

下：干拓後の内浦（赤枠内）

(出典：国土地理院の空中写真を加工して作成)

も普及し、白須賀地区ではエンドウマメやセルリーなどの栽培も始まりました。

昭和51年(1976)から平成7年(1995)まで、旧湖西市の全域を対象とした農村基盤総合整備パイロット事業が始まり、ほ場整備、農業用水路や農道の整備、農村集落の排水整備、農村公園の建設、及び農用地の新規開発が大規模に行われました。この事業により、旧湖西市では整然かつ広大な田畠が広がる農村景観が形成され、大型機械の導入やハウス建設が意欲的に進められました。また、畜産環境の整備も昭和50年代(1975~1984)に進められました。

【浜名湖競艇の整備】

戦後、逼迫していた新居町の財政を立て直したのが浜名湖競艇(現在のボートレース浜名湖)でした。昭和26年(1951)にモーターボート競争法が交付されると、新居町と舞阪町(現在の浜松市中央区)は積極的に競艇の誘致を行いました。最終的に雄踏町(現在の浜松市中央区)を加えた3町で組合を組織し、競艇事業を運営することが決定しました。舞阪町の弁天島に浜名湖競艇場が置かれ、昭和28年(1953)に浜名湖競艇が初めて開催されました。昭和39年(1964)からは湖西町(旧湖西市)も浜名湖競艇の運営に参加しました。

その後、台風による被害や、土砂の堆積による水位の低下により弁天島での操業が難しくなったため、昭和41年(1966)に新居地区の浜名湖の水面を埋め立てることで、新たなレース場が建設されました。このレース場への移転に伴い、浜名湖競艇組合は浜名湖競艇企業団へ改称し、組織の整備と拡充が図られました。新幹線をまたいで競艇方面へ向かう跨線橋や、新居町駅における競艇場専用乗降口の整備は、この時期に企業団によって行われました。

移転後の浜名湖競艇は賑わいを見せ、昭和48年(1973)以降は開催日1日あたりの平均来場者数が1万人を超えるようになりました。これに伴い、周辺道路の交通渋滞が激しくなったため、昭和56年(1981)に道路の拡充が行われました。また、浜名湖西側地区の渋滞緩和と地元の交通安全を目的に、平成8年(1996)に浜名湖をまたぐ形でサンマリンブリッジが開通しました。浜名湖競艇から入る収益金は非常に大きく、昭和43年(1968)以降は新居町の収入の40%以上を占めました。新居町は収益金を土木建築や公共施設の充実化、産業



1-57 農村基盤総合整備パイロット事業による耕作地の変化(白須賀)
上: 1960年代
下: 2021年
(出典: 国土地理院撮影の空中写真)



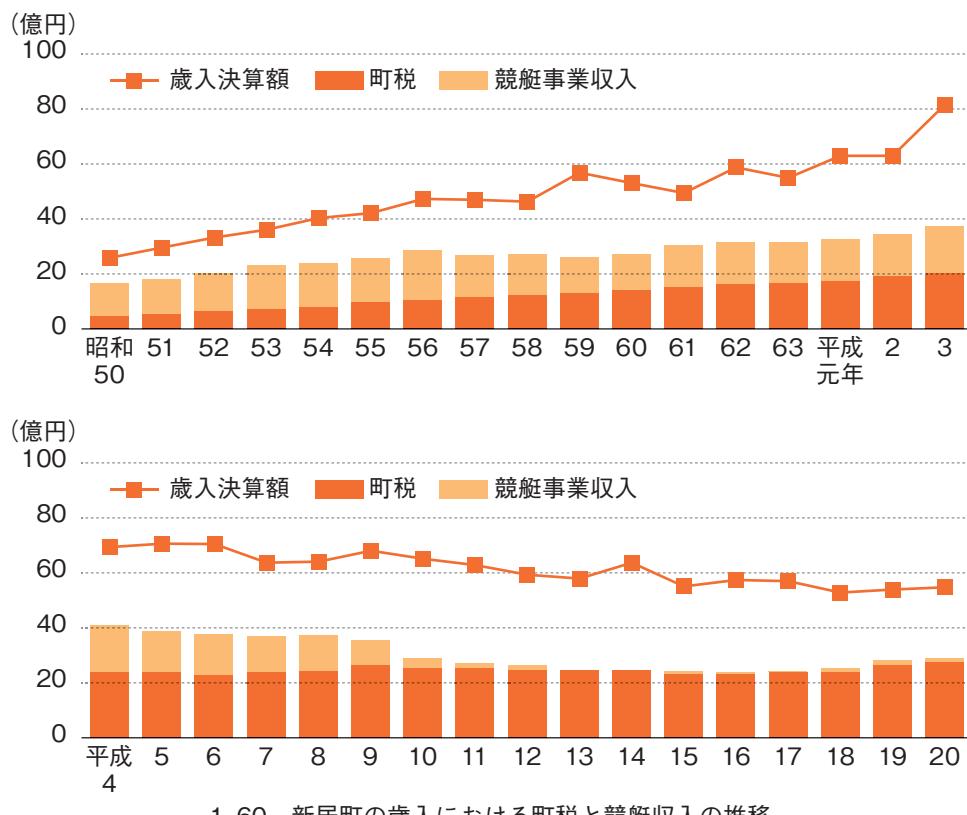
1-58 ボートレース浜名湖



1-59 サンマリンブリッジ

の発展、教育振興に充てたため、町の公共施設は他市町村と比べると非常に充実していました。

設置後から順調に成長してきた浜名湖競艇ですが、平成3年(1991)から売上高が減少しました。はまなこきょうてい新居町の競艇収益金も平成4年(1992)を境に減少し、平成13年(2001)以降は新居町の収入の5%に満たない金額になりました。競艇収益金に財源の多くを頼っていた新居町は財政難に陥り、平成22年(2010)に湖西市と合併しました。現在のボートレース浜名湖は、本市と浜松市が構成する浜名湖ボートレース企業団により運営されており、企業団から分配される収益金は本市の重要な財源になっています。



1-60 新居町の歳入における町税と競艇収入の推移
(出典：町制百二十周年記念誌『新居人の百二十年』)

2. 災害の歴史

(1) 地震・津波

遠州灘沖の南海トラフで生じる巨大地震（以下、南海トラフ地震）は、記録に残るだけでも過去に9回発生しています。このうち本市の被害が記録に現れ始めるのは、明応7年（1498）の明応地震からです。この地震は後述する風水害とともに、浜名湖に今切口が形成された要因の一つとなりました。慶長9年（1604）の慶長地震では、橋本地区周辺の民家80軒ほどが海に引き入れられ、人や馬が数多く死傷したことが記録されています。

宝永4年（1707）の宝永地震以降は、地震に関する複数の文字資料が残されるようになったため、本市の被害を詳しく知ることができます。宝永地震では、新居地区と白須賀地区の沿岸部が甚大な被害を受け、多数の犠牲者が出了ることが分かっています。新居宿と新居関所は壊滅

し、現在地への移転や建替を余儀なくされました。また、
当時台地の下に位置していた白須賀宿や長谷集落[白須賀
地区]も津波により壊滅し、現在地である台地上へと移転
しました。移転前の長谷集落の所在地である長谷元屋敷
遺跡[白須賀地区]の発掘調査では、明応地震、慶長地震
及び宝永地震の津波堆積層や、宝永地震により壊滅する
前の長谷集落が見つかりました。

嘉永7年(1854)の安政東海地震では本市沿岸部が津波
に襲われ、建物の倒壊や液状化が生じました。新居関所
も再び全壊したため、安政2~5年(1855~1858)に建
て替えられました。

戦時中の昭和19年(1944)に発生した昭和東南海地震
の際にも、建物の倒壊や液状化、鷲津駅ー新所原駅間の
線路崩壊、新居関跡の関所建物の破損など、多数の被害
が生じました。

南海トラフ地震以外にも浜松市北部や三河湾の活断層
による地震が、有史以来度々発生しています。戦時中の
昭和20年(1945)1月13日、三河湾を震源として発生し
た三河地震の際は、新居地区で震度5相当の揺れが生じ
ました。

(2) 風水害

本市は、台風の影響を受けやすい立地にあり、これまで
に洪水や強風、高潮が頻繁に発生しました。天平12年
(740)に作成された『遠江国浜名郡輸祖帳』は、本市の風
水害の様子を伺うことができる最古の資料です。この資料
中には、新居郷から本来収められるはずだった税が風
水害により損なわれたことが記されています。

明応7年(1498)から永正7年(1510)にかけて、遠江
と三河で風水害が頻発しました。これは前述の明応地震
とともに浜名湖南部に今切が開口する要因となりました。
特に永正7年(1510)の高潮は規模が大きく、浜名湖南部
を決壊させ、今切口が出現したことが複数の資料に記されています。高潮による被害は江戸時代の資料にも記録されています。特に元禄12年(1699)の高潮は新居関所と新居宿に大きな被害を与え、移転を余儀なくさせました。



1-61 長谷元屋敷遺跡
発掘調査により、当時の建物跡などが見つかった。



1-62 昭和東南海地震によりひび割れた
出入小学校の校庭



1-63 昭和東南海地震により半壊した建物

明治時代以降も台風や高潮の被害は毎年のように発生しています。昭和28年(1953)の台風13号では、196cmの高潮に見舞われ、新居弁天 [新居地区] の全域で浸水被害が生じました。また、昭和34年(1959)の伊勢湾台風の際には、新居地区で風速39.1mを記録しています。

河川の改修や、道路排水設備及び防潮堤の整備が進んだ現代では、昭和時代以前と比べて洪水や高潮の発生頻度は低くなりました。しかし、平成2年(1990)の台風20号や令和5年(2023)の台風2号の際は、本市で斜面崩落や冠水、突風による倒木が発生しました。